みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴル風物誌：ことわざに文化を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4580

人間

貴族

――官吏をしたがえ、金持ちとともに

一般にことわざの世界では、かつての王侯貴族たちはもっぱら批判の対象となるばかりである。とりわけ、社会主義的潤色があるにちがいないところでは、なおさらであろう。中国内モンゴル自地区で収集され、編集された『ことわざ集』によれば、モンゴルのことわざには、つぎのように貴族が登場する。

「疲れたウマに鞭が多い
　疲れた人に貴族が多い」

「痩せウマに鞭」あるいは「痩せウマに針立てる」といったことわざに相当しよう。ウマは共通しているのだが、そこに貴族が並行してあらわれている。むしろ、つぎのように貴族だけに省略されることさえある。

「貧乏人には貴族が多い」

モンゴルの貴族は、イヌとともにことわざで登場することが多い。

「貴族は従者を
従者はイヌを
イヌは尾の毛を」

「貴族はイヌに指図する
イヌはネコに指図する」

いずれも、権力に応じて、上から下へとつぎつぎにたらいまわしにすることを表現したものである。「貴族」と「イヌ」の二つの語彙は、語頭の音がよく似ていて頭韻をふむことができるため、連想されやすく、しばしばセットで登場するのである。たとえば、つぎのことわざでも、貴族はイヌと同類項にされてしまっている。

「イヌを信じて家に糞をし

貴族を信じて事をひっかきまわす」

信じたイヌが家に糞をするように、信じた貴族は問題を解決するどころかよけいにひっかきまわして面倒をおこす、というわけである。信じるにたりない人物を信じるとろくなことがないという意味のことわざであり、貴族はイヌと同様の、信頼のおけない存在と化している。

このように、貴族はしばしばイヌと肩をならべて登場するほかに、しばしば官吏をしたがえるものでもある。「オオカミのような貴族」は「キツネのような官吏」をしたがえて、「類は友をよぶ」のである。同様のことわざに、

「シシのような貴族に
トラのような官吏がしたがう」

がある。そのほか、貴族と官吏はつぎのように並列されることもある。

「ロバに乗った貴族
ニワトリに乗った官吏」

貴族も官吏も、威張ってばかりいる御人だといえよう。しかし、ロバやニワトリに乗るようでは

たかが知れている。運の悪い人、つまらない人、虚勢をはる人、そんな人物をからかうことばとして用意されたことわざである。

また、つぎのように貴族と官吏とをセットにすると、自分自身をあざむくようなむなしい期待をいだいている人物を風刺することばになる。

「自分自身で貴族になり
自分の影を官吏にする」

貴族はまた、富裕者とならべて批判されることが多い。

「貴族が貧窮すると強盗になる
富裕者が貧窮すると盗人になる」

権力や財をにぎっていた人がそれらを失うと、ますます貪欲になり、いっそう残虐になるという意味であるという。富裕者もまた、貴族におとらず社会的批判にさらされてしまうのは、ことわざ世界ではしかたがないのかもしれない。

実際のところ、革命以前のモンゴル社会では、貴族がかならず富裕であるとはかぎらず、貧乏な貴族も少なからずいた。しかし、ことわざの世界では、貴族はほんとうに富裕であるとないと

にかかわらず、富裕者と同様の存在であることはまちがいない。つぎのことわざでは、タイジという爵位で貴族が登場する。

「借金が千両に達すると
　タイジが安堵する」

貧乏な人の辛苦は、富裕な人の喜びであるという意味である。
富裕な人ともなれば、つぎのように乞食と対比されて批判されやすい。

「十万頭を烙印した金持ちより
　賢い乞食のほうがまし」

「上等の羊皮を着る金持ちより
　賢い乞食」

このほかに、王や王妃もまた批判の対象として格好の素材となっている。

「知識のない王は

冠をかぶったロバ」

「王より門番がまし
王妃より侍女がまし」

その意味するところは明白であろう。民族の英雄として尊敬されているチンギス・ハーンならともかく、一般の王侯貴族や富裕者層は、以上のように、ことわざのなかではもっぱら批判されるばかりであって、残念ながら尊敬されることはまずないといってよい。

ラマ僧

――智恵なき知者

貴族にもまして、ことわざのなかではげしい批判にさらされている存在がある。「ラマ」とよばれる仏につかえる僧たちである。ときに「マーム」という名で登場することもある。今日「マーム」あるいは「マームー」というと、もっぱら「おねえちゃん」といった意味に近い幼児語として辞書にしるされているが、かつて「マーム」といえば、縁やゆかりがあって、とりわけ親しみのあるラマ僧にほかならなかった。

「ラマがだめなら
　マームをまねこう」

ちょうど適切な人がいないから、おまえさんですましておこう、というほどの意味で、人をみくびった表現にしあがっている。かつては息子の一人をかならずラマにさせようと寺へあずけて修

行に出すほど、人びとはチベット仏教を信仰していたものだった。しかし、今日のことわざにみるかぎり、そうした信仰のよすがはない。

「家畜は、みなハルザンか
マームは、みな博学か」

「ハルザン」とは、頭部全体が黒や茶色などの色がついているのに鼻面の部分だけが白いという毛並をさしている。家畜にしばしばみうけられる模様であるが、だからといって、すべての家畜がそのような模様の毛並をしているわけでもない。ものの良し悪しや差異を区別できずにみなおなじだとみる浅見を批判したことわざである。同類のことわざとして「ロバはみな灰色か、母はみな白髪か」という表現もあるが、僧が登場している場合には、外見より中身が肝心であるという真意がかくされているように感じられる。つぎのことわざの場合、かならずしもマームが批判されているわけではないが、僧に特有な外見的特徴をいかしながら、やはり表層的な見方を批判することわざにしあがっている。

「黄色い衣裳を着ているだけで
私のマーム」

僧のようによそおっていれば、ただちに僧だと信じてしまう、そんな単純なものの見方が非難されている。

ところで、僧というものは、ことわざの世界ではしばしば知ったかぶりをするものである。

「老いた弟子が
　観音様に経をおしえる」

まさに「釈迦に説法、孔子に語道」であり、モンゴルでは修行僧こそが、不遜にも釈迦に説法するような人になっている。できないくせにできるようにふるまうのもまた僧である。

「へたな読み手は数珠をかぞえる
　へたな縫い手は布をはかる」

要は、「論語読みの論語知らず」に等しい。

知ったかぶりをするくせに、いざ方策がつきてしまうと、つぎのように、何をしでかすかしれたものではない。

「ラマはこまると

仏をのろう」

僧はまた、つぎのようにまことに手前勝手に人びとをごまかす存在でもあるらしい。

「よくなれば僧のおかげ
悪くなれば業の因果」

ラマにつきまとうそんないいかげんなイメージを利用してつぎのようにいう。

「ラマの帽子に前後なし」

決まった方法などないから、どうやってもよい、とこのことわざはいう。

仲間うちでたがいに和すことのできない状況も、ラマをたとえにもちだして表現できる。

「ラマはラマに弱い
ヤギは疥癬に弱い」

また、モンゴルでの「虻蜂取らず」は、二つの寺のあいだを奔走する姿でえがくこともできる。

「二つの寺のあいだで
粥もなければお茶もない」

「二つの寺のあいだを歩き回っているうちに
お茶も飲まずに夜を明かした」

おなじ奔走でも、つぎのような場合だと、利益の争奪に熱中する人をののしる意味になる。

「屍肉を食べたイヌ
法会に奔走したラマ」

以上のように、ことわざのなかでラマたちはもっぱら悪人として脚色されている。もちろん社会主義の影響があることは否めない。ただし、政治的な脚色をとりのぞいてもなお、虚学より実学を重視しようとする精神は、基本的にモンゴルに根深く存在しているように思われる。つぎのような一連のことわざから、学識よりも経験を重視するというプラグマティズムが感得されよう。

「百人の僧より

牧民の家にまねかれて読経するラマ僧

料理番が大」

「処方をまなんだ医者より
苦労をあじわった尼」

「ラサに六年くらした愛しいお尻」

みせかけばかりの教養は、これほどまでにきらわれているのである。ここでいう医者とはラマ僧であり、一方、プラスの評価をうけている尼もまた仏につかえる身である。したがって、仏教関係者が徹底的に批判されているとはいえない。批判の本来の対象は、みせかけの教養や生半可な知識である。このような精神的風土にあっては、たとえば「門前の小僧、習わぬ経を読む」ということ自体、あまりよい意味でもちいられることはない。

「学校の戸によこたわるイヌは
『あぬ、いぬ』と吠える」

「学校のスズメは
『あるいは』といって飛ぶ」

「役所のまわりのイヌは
『あの、その』と吠える」

「役所のイヌは
吠えるときに『あの、その』という」

「門前の小僧」が習いもしないお経を自然におぼえてしまうように、学校や役所の門前の動物たちはいかにも学のあるような鳴きかたをする、というのである。いずれも環境の影響をうけるという意味であり、その真理は「門前の小僧」にも「門前のイヌやスズメ」にも通ずる。しかしながら、モンゴルふうの表現では、けっしてその同一の真理がプラスに評価されているわけではないことがうかがわれるであろう。知ったかぶりをするような浅薄な知識は批判にさらされる。そして、そのような見せかけの知識をひけらかすものの代表として、ラマが格好のターゲットにえらばれてしまうというわけである。

賢者

――移動する旅人

「門前の小僧」が習いもしないお経を自然におぼえてしまうことを好ましからぬ現象としてとらえて嫌悪をあらわにしめすモンゴルでは、行動力こそが高い評価をうける。

「よくしゃべる者は学習をつみ
よく行動する者は経験をつむ」

行動力が経験につながるもっとも重要な要素として評価される以上、行動力のない人物は、つぎのように罵倒されるものである。

「自分の妻よりほかに人と知りあったことがない
自分の鞍より高い峠をこえたことがない」

「五より上の数を知らない
平原より向こうの土地を知らない」

「妊娠した女性が小便をするところより遠くへ行ったことがない
小さな子ウシが草をはむところより外は見たことがない」

最後の一例は、『元朝秘史』にも登場しており、格調高い、正調罵倒語ともいうべき成句である。これらの一連の語句には、一つの特徴が共通してみとめられよう。すなわち、経験の多寡が、距離あるいは移動によってはかられていることである。まさに行動半径のせまさが罵倒されているといえる。

モンゴルでも当然ながら「百聞は一見にしかず」であり、

「耳はうそつき
目は真実」

といわれるが、つぎのようにやはり移動の要素がくわわって、行動力が評価された言い回しをとる。

「聞くより見るほうがよい
座るより行くほうがよい」

経験が重要であることは人生の真理にほかならない。ただし、その重要な経験という要素を、かくも単純に移動そのものにおきかえている点に、移動を是とする遊牧民の思想がうかがわれるのではないだろうか。ざぶとんに穴のあくまですわりつづけた学者よりも、移動する者こそが偉大である、とモンゴルのことわざはいう。

「ざぶとんに穴をあけた賢人より
多くを周遊した愚人」

「寝てばかりいる賢人より
放浪する愚人」

「枕に穴をあける賢人より
鞍敷に穴をあける愚人」

このように、移動そのものを人生の経験と同義にとらえるのが、遊牧民の精神的風土というものなのであろう。

「草原に野宿して
火打ち石に枕する」

という生活のさまは、あたかも乞食をえがいたように思われるかもしれない。しかし、このような人物こそ、モンゴルでは、誰よりも遠くへ行き、誰よりも多くを見て、苦労を重ねた好人物となりえるのである。

もちろん、遊牧民が生業活動の一貫としておこなう移動は、けっして浮浪ではない。つぎのように、周到な準備のもとに実行されるものである。

「移動するまえに土地をえらべ
下営するまえに草地をしらべよ」

賢者はじょうずに移動し、移動してますます賢者の資格をえるのであろう。

競馬の特訓に余念のない子どもたち

老人と若人

——重石と泉

モンゴルでは移動がそのまま経験を意味するほど重要だからといって、移動以外の方法が役に立たないわけではない。経験はさまざまなかたちでつむことができるし、その重要性はいろいろな表現でかたられる。「餅は餅屋」を、

「茶をわかすのは尼が上手
　糊をつくるのは大工が上手」

という。また、熟練の必要性は、

「仕事に熟練
　荷物に縄」

と表現される。多くを経験して熟練している状態をつぎのようにえがくという。

「焼肉のにおいをまちがえない
カミツレのけむりをまちがえない」

ところが、経験すればかならず熟練するというわけでもあるまい。経験をつんでも熟練していないという場合には、つぎのような表現が用意されている。

「四角い木に
丸い穴がでない」

経験があっても熟練しているとはかぎらないのだから、ましてや老齢だというだけでは意味がなかろう。モンゴルのことわざにも、つぎのように長幼の序がたしかにみとめられる。

「からだに頭がある
服には衿がある」

しかしながら、わたしたちが中国について想像するほど、長幼の序という概念がモンゴルの人びとのあいだでも卓越しているわけではなさそうである。

つぎのような表現であれば、なんとか老人にもプラスの評価があたえられているといえよう。

「尾のねもとは白くなった」

経験をつんで熟練した人をこのようにたとえるらしい。家畜の毛色は、成長するにつれて多少変化するものである。とくにウマの場合、その尾の色が変わってゆくという特徴をもっている。尾の毛色の変化に注目している表現が、いかにもモンゴルらしい。

つぎのようなことわざの場合、一見して年輩の人の意見が尊重されているように思われる。

「冬の寒さを春に
老人の熟慮を子どもに」

年の甲を尊敬している意味でこのことわざをもちいることもあるが、年輩の人の熟慮をみごとにうけついでいますね、とむしろ若者をほめるときにもちいるというから、あながち老人を尊敬したことわざとはいえないのである。

つぎのようなことわざになると、老人はただただ厄介な存在としてうきぼりになってしまう。

「老人は死ぬことで
子どもは泣くことで」

「泣く子と地頭には勝てぬ」というが、子が泣いて人をこまらせるように、老人は死ぬので人をこまらせるというわけである。さらにまた、老人のことはつぎのように表現されるというから、とても尊敬されているとはいえまい。

「山を見る目がない
肺を噛む歯がない」

肺という内臓は、食糧としてみたとき、心臓などよりもかたいので噛むのがややむずかしい。だからといってそれほど噛みきるのが困難な部位でもない。それも噛めないし、山も見えないような老人は、まさに「老いては騏麟（きりん）も駑馬（どば）に劣る」とけなされているに等しい。

さらにつぎのような表現は、いかにも即物的な形容であるといえよう。

「穀類のトロム
糞のオート」

あたたかい高床にすわってキセルをすう老婆

トロムとはふつう皮をまるはぎにしてつくった袋で、オートはふつうフェルト製の袋で、いずれも袋とみなすことができる。穀類を食べる袋で、糞をためる袋くらいにしか、老人をあつかわないモンゴルのことわざである。同様に、

「穀類の消費
西側ハンジの負担」

と表現することもある。西側とは、おおよそ南を向いて方位をさだめるモンゴルでは右側であり、上座に相当する。上座にすわって床の負担になり、穀類を消費するもの、それが老人だというのである。ハンジとはいわばオンドルのような下からあたためる高床であり、この単語があることから、モンゴルのなかでも固定的な住居をかまえて定着している地域で採集されたことわざであることが知られよう。

万里の長城をしばしば南下して農耕地帯を襲撃した塞北の民族匈奴について、『漢書』は、老をいやしむ気性があると記録している。それが、騎馬遊牧民の伝統というものなのかもしれない。たとえ生活様式が変化して、オンドルを利用し、穀類をたっぷり食べるようになっても、あいかわらず老をいやしむ気性は変わらないものらしい。

「ハンジの負担
　ハヤーのふさぎもの」

ハヤーとは、ゲルとよばれる天幕のまわりをかこむ風よけである。テント式の住居では、壁をおおっているフェルトのすそを、夏にはまくって風通しをよくする一方、冬にはまわりを木琴のような構造をした道具でふさぐなどしてすきま風をふせぐ。老人は、そうしたハヤーをさらにふさぐような、まるで重石（おもし）のようなものにすぎないというのである。

固定式住居と移動式住居をセットにした右のことわざでは、農耕地帯であれ牧畜地帯であれ、その生活様式をとわず、モンゴルの老人がいわば漬物石だといっているようなものである。

老人がこのように粗略にあつかわれている世界では、先生と生徒はどのような関係にあるのだろうか。子弟関係については二つの立場がありうる。

「歯のない先生から
　目のない弟子」

あるいはまた

「目のない先生から

歯のない弟子」

さらにまた

「苦いウリのつるに
甘いウリはできない」

といった表現はいずれも、先生が悪ければ弟子も悪いという立場である。「ウリのつるに、ナスビはならぬ」に相当しており、表現も似ている。ただし、草原の食卓にはもともとウリやナスビなどないから、モンゴル語で野菜を分類して表現するのはむずかしかろう。そこで、甘いと苦いという対比的表現が代用されている。これらのことわざに対して、いわゆる「出藍のほまれ」「青は藍より出て藍より青し」とみる立場もあり、つぎのように表現される。

「前に出た耳よりも
後ろに出た角が長い」

耳や角をもちいて表現するところが、家畜をつねに観察して思考の道具としているモンゴルの人びとらしい。

大地に腰かけて語らう若人たち

さて、老人がもっぱらいやしむべき存在として粗略にあつかわれていることわざの世界なら、若人はさしずめ謳歌される存在であるにちがいない。

「湧き出ている泉
　はえている花」

といえば、若人の活力あるいは発展しつつある新しいことを賞賛した表現になる。若き人びとに対しては、つぎのようなはげましのことわざも用意されている。

「髪の黒いうちがよい
　歯の白いうちがよい」

「赤き唇あせぬまに」という歌詞にあるように、若いうちにやりとげよと教えている。

わたしたちなら、若さといえば、繁った木々やその緑や青い山々を連想するにちがいない。しかし、一面緑の絨毯になるモンゴルでは、それをとりたてて若さのシンボルにすることなどできないのかもしれない。緑のなかに点在する泉や花が命の輝きのシンボルとなり、黒髪や白い歯が若さのシンボルになっている。

つぎのことばは、将来の可能性の大きさをしめして、若人をはげます表現であるという。

「若い人の
道のりは長い」

「君の行く道は果てしなく遠い」という歌詞も、「long and widing road」も、若者の行く手にある困難をしめす。しかしながら、モンゴルの大草原につづく道なき道は、可能性こそをしめすものであるらしい。

すでにいくつかの例をしめしたように、モンゴルでは、若輩ものが尊大にふるまうことはしばしば「種オス」の家畜をもちいた比喩で批判される。しかし、それはなにも若さそのものが罪なのではあるまい。いやおうなしに重石くらいにしかあつかわれない厄介な存在と化してゆく「老い」に対して、「若さ」はあくまでも賞賛されているのである。

英雄

――孤独な生涯

これまですでに「ヒツジ」の項に「英雄」が登場した。ヒツジに対してのみ「英雄」であることは傲慢にほかならないし、「英雄」に対してのみヒツジであることは愚劣にほかならない。このような場合の「英雄」は単語として登場しているだけで、英雄とはいかなる人物かというその尊敬すべきありようをしめした表現にはなっていない。また、富裕者でも雪害にあえぐように「英雄」も一本の矢で命をおとすという。これはまさに「おごれるものはひさしからず」「盛者必衰」であって、英雄といえどもそのむなしさがかたられているばかりである。

草原にくらす人びとがどんなに英雄の登場をまちのぞもうとも、真の英雄はさほど頻繁に登場するわけではあるまい。ことわざの世界でも、「英雄」はけっして頻出単語ではない。希有な存在だからこそ頻出しないのであろうか。それとも謙虚な存在だから饒舌に登場しないのだろうか。

一代で天を駆けたといわれるチンギス・ハーンの少年時代は、『元朝秘史』に「尾よりほかに鞭はなし、影よりほかに友はなし」と形容されている。財産もなく、友もない、という孤独な様子

がえがかれたこの連句は、今日でも成句として人の口にのぼる。草原の英雄には、こうした孤独のイメージがつきまとっている。

右のことわざでは、尾と影とがセットになっている。モンゴル語で尾は「スール」といい、影は「スーデル」という。頭韻による連語がつくりやすいために、尾と影をセットにしたことわざは多いのである。

「尾は頭にしたがい
　影はからだにしたがう」

これを省略して「尾は頭を、影はからだを」ということもある。その意味するところはつぎのことわざと等しい。

「針がそちらへ向けば
　糸もそちらへ」

すなわち、指導者のながれのままにしたがう人の様子をえがいている。針が主人とするなら、糸は従者である。尾も影もともに、意志薄弱な人物や、はかない存在を象徴しているといえよう。

ところで、尾といえば、モンゴルでも「尾鰭(ひれ)をつける」の意味をもつことがある。

「上にたてがみをくわえ
下に尾をくわえる」

このことわざは、誇大な歪曲を意味しているから、まさに「尾に鰭をそえる」に相当する。さきにのべたように、尾の色の変化で「齢を重ねる」ことを表現することもできた。しかし、そうした意味でもちいられるよりも、影とセットにしやすいことが影響して、うつろなものを象徴することのほうが多いようである。つぎもその一例。

「自分の尾におどろいて逃げだし
自分の影におどろいて飛びだす」

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」に似て、それほどでもないものをたいそうこわがった状態をえがいたことわざである。尾はもっぱらウマの付属品で、影はもっぱら人の付属品とみなすと、尾と影のセットは人馬一体のセットであるともいえよう。人馬一体ではあるけれども、尾や影のようなはかない存在だけをしたがえつつ孤独に生きる人の一生は、つぎのようにえがかれる。

「壁のすそで生まれ

岩のすそで死ぬ」

家で生まれて戸外で死ぬものだという表現には、人はどこでどうなるとも知れないという人生の無常感がこめられている。「人生まれて三国に果つる」ようなこのことわざによって、英雄の一生を表現しているのだという。「人間（ジンカン）いたるところに青山あり」のような成句よりも、ずっと悲壮感がただよっているように思われる。

そもそも、岩はモンゴル人の死に場所なのであった。草原にポツポツと点在する白い天幕がこの世の住処（すみか）なら、草原にゴツゴツつきでて灰色の肌をさらす巨大な岩は、あの世の住処である。草原に生きた人の死体は、岩のふもとに風葬された。貴人ならさしずめそんなところに埋葬されたであろう。埋葬方法のちがいこそあれ、身分のちがいにかかわらず、岩はあの世の家となる。だからこそ、死が近づくことはつぎのように表現される。

「壁の家を遠ざかり
岩の家に近づく」

故郷を出てどこへ行くとも知れぬ草原の英雄は、いわば「畳の上で死ぬ」ことはない。孤独な一生の幕を、岩に枕してとじるものなのである。

人は死して岩をすみかとする

結婚

――人生の決断

人は結婚という儀式をへれば、社会的にみとめられた家庭をつくることができる。儀式を形式にすぎないとして拒絶するにしても、形式にとどまるからこそ受け入れるにしても、ともかく、相手がいないことには話にならない。

「一人では家庭にならぬ
一本の木では火にならぬ」

なにやら物騒なものと並列されているが、家庭にかぎらず「世のなかは、もちつ、もたれつ」なのである。

双方の合意にもとづくはずの結婚も、ことわざの世界ではまだまだ男性優位である。もっぱら男が女をみさだめる。ことわざにいわく、

「男にきらわれた女の
頬はひしゃげて見える」

ひとたび嫌われたらどうしようもない。女たちはおうおうにして美貌をもってみさだめられるが、こと嫁に関するかぎり、つぎのように実用本位でもあるらしい。

「嫁をみるなら早朝に
草地をみるなら正午に」

働きものは朝早く起きるから、嫁えらびは朝にかぎるというのである。

ただし、せっかくみさだめても、他家にとついでしまえば何の意味もなかろう。

「他人にとついだ娘
岩に射た矢」

「覆水盆にかえらず」に相当することわざである。あこがれていた男性にとっても、また嫁に出した両親にとっても、もはやもとどおりにはもどらない。時期を逸しないうちに、さっそく嫁に

もらうにかぎる。

ところが、ことわざのなかの女たちは、嫁にゆくときも、嫁にいってからも悪くいわれてばかりいる。たとえば、

「嫁にゆくとき
耳に穴をあける」

といえば、「泥棒をとらえて縄をなう」を意味する。年頃の女性は耳に穴をあけてピアスをしているものだが、嫁にゆくときになってあわてて耳に穴をあけているようでは、「泥縄」だという。また、たとえば、結婚式の披露宴でうっかりボロをだすかもしれない。

「ほめられた娘が結婚式に」

「気に入った娘が結婚式に」

肝心なときにボロをだすことが、これほど省略されたことばのうちに示唆されている。いい気になってボロをだすなという教訓だから、いいかえれば「勝って兜の緒をしめよ」である。ただし、兜の緒をしめなければならないのは、将軍ではなく、花嫁だというのである。ひとたび嫁になる

と、ついつい傲慢になってしまうのが女だとでもいいたげである。
家事や牧事や育児にと、嫁にはとかく仕事が多い。そんな苦労にむくいることわざはないのだろうか。

「新しい嫁があせっているのに
真鍮の鍋はあせらない」

時いまだいたらず、あせっても無駄、それにしてもああ待ちくたびれた、という心境を表現しているという。「待つ身には長い」にも相当しよう。しきりにあせる嫁の労働も、むくわれているわけではなさそうである。
つぎのことわざも、外見で判断するより、結果をみろという意味である以上、けっして嫁にとってめぐまれたことわざではあるまい。

「新しい嫁をみるより
新しい子をみよ」

さらに、みこみがないという形容をつけられて、障害のひとつにかぞえられることさえある。

結婚式から一夜あけた新婚カップル

「みこみのない嫁に
消えた火」

ことわざの世界にかぎれば、女は結婚しないほうがいいかもしれない症候群にみちている。

結婚をつうじて、花婿側も花嫁側も、姻戚という親戚関係をひろげることができる。姻戚に関する評価も、もっぱら男の側からしかかたられない。

結婚前なら、

「私になくても
母方の親戚にある」

である。これは、自分にはありませんが、親類にありますからというセリフであって、「トラの威をかるキツネ」に相当することわざとなる。こんなふうに利用されがちな母方の親戚も、嫁が来るとさっそく疎んじられてしまう。

「母の親戚はあちらへ
妻の親戚はこちらへ」

これはすなわち、

「乳をあたえた母よりも
若い妻」

と同義である。妻をもらって、老いた母やその親戚を粗略にあつかう男の様子がえがかれている。嫁をもらうと、男の良し悪しもあらわになるものらしい。

モンゴルの結婚は、ことわざの世界でけっして墓場になっているわけではない。しかしながら、女性にとってはかなりの試練であり、男性にとっても決断のときである。ひとりの娘をもらうことによって、つぎのように腰をまげなければならなくなるのだから。

「娘をあたえた人は弓なりになる
娘をもらった人は湾曲になる」

他人の援助をうけた人は軽んぜられるという意味のことわざであるという。このことばで、自力更生が強調されることになるらしい。「人に受くるものは人をおそれ、人にあたうるものは人におごる」という成句に相当するだろう。

嫁をもらうのがいやなら、婿になるという方法もある。しかし、そうなると、

「新しく婿になった人は
いなごの太股で満腹する」

というほど、遠慮しなければならないかもしれない。このように過度に遠慮することを、まるで婿殿だと評するくらいだから、いいかえれば、婿というものは遠慮するものなのであろう。

娘をもらったがゆえに卑屈になるのもいやだし、かといって婿になって遠慮するのはもっといやだということになれば、一生涯ただ一人でいるにかぎる。

「耳を枕にし
太股をかけふとんにする」

これは、かなり貧困な生活だといわざるをえない。それでも、扶養する家族もいないこんな生活こそは、ひとりで自由気ままな状態を意味しているという。

どんな嫁をえらぶか、はたして嫁をもらうか、それとも婿になるか。ことわざの世界では、男が決断をせまられている。

親族のきずな

――近いようで遠く、遠いようで近い

かつて日本でもそうであったように、モンゴルでも十人兄弟などざらであった。旧ソ連と中国にはさまれたモンゴル国では、人口増加政策が採用されてきたため、今日でも子だくさんであるが、中国領土にふくまれる内モンゴル自治区では、兄弟の数もめっきり減っている。子どもが多いのは、もはやことわざの世界だけかもしれない。

一口に子どもといっても一様ではない。子だくさんであればなおさらである。

「父の子どもにまだらもいれば斑点もいる
山陰の木に高いものもあれば低いものもある」

ちなみに、ここで山陰というのは、山の北斜面のことである。冷涼で乾燥しているモンゴルでは、北斜面のほうが雪解け水にめぐまれる。より緑ゆたかで、木がしげるのは、北側斜面なのである。

どんなにできが悪くてもかわいいのが、わが子というものだ。あるいはまた、できが悪いほどかわいいというべきかもしれない。いずれにせよ、親バカは世界共通の真理であるらしい。

「しま模様であっても子どもというもの」

まだらや斑点やしまといったあきらかに家畜の毛並の模様をもちだして、子どもの千差万別をたくすあたりが、モンゴルらしい表現になっている。さらには、親子関係を全面的に家畜にゆだねてしまうこともある。

「ラクダは悪くても
子ラクダには良い」

この場合、親バカというよりも、醜悪な人物も子からみれば親として優しいという意味でもちいられるらしい。子からみた視点の方が卓越している。

「自分の子は人間
他人の子はカエル」

というほど、「親には目なし」である。

「目のなかに入れても痛くない」ほどかわいがっているなら、つぎのように表現される。

「見つめる目のひとみ
　口づけする鼻の麝香（じゃこう）」

親はつねに子どものことを考えているものなのに、

「父の考えは子孫に
　子孫の考えは石に」

とあるように、やはりモンゴルでも「親の心、子知らず」であることにかわりない。とくに、甘やかされた子には困ったものである。

「甘やかされた子は
　父の頭であそぶ」

父親の頭をボールのようにしてあそぶのではたまらない。甘やかしてはならないし、厳しすぎて

もいけないし、育児やしつけは一苦労である。だから、子どもはつぎのように口実にもなる。

「怠惰な母にとって
子どもは口実」

子どもは厄介な存在ではあるが、子を産み育てることの意義をことわざはつぎのように宣言する。

「ハンジ（高床）の上に糞する子がいなければ
墓の上に土をかぶせる人もない」

たしかに子どもは負担にほかならないが、将来は仇でもうってくれるやもしれぬ。そんな可能性があればこそ、つぎのようなことわざも成り立つ。

「成長する子にうらまれるなかれ
老いた人に借金するなかれ」

同様に、「息子のある人と賭をするな、メスウマのある人と賭をするな」「メスウマのある人より、息子のある人」というのは、いずれも「後世おそるべし」に相当するであろう。

家族の肖像

子どもばかりでなく親戚縁者も、厄介で大切だからつぎのようにも表現される。

「鼻水がたれているといって
　鼻をどこに捨てようか」

遠くにすんで日頃疎遠な関係にあるならば、やはり、

「遠くの近親より
　近くの友人」

というものである。

「兄弟は他人のはじまり」というように、たとえ兄弟でも仲が悪くなることがある。モンゴルではつぎのような奇妙な言い回しで表現される。

「生まれて以来
　二人の母の乳を飲んだ」

モンゴル語には「二母から乳を飲む」という意味の動詞がある。実の母である家畜に十分な乳が

出ないとき、別のメス畜を乳母にしたてて、二頭の母から乳を飲むようにする。そうして育った家畜は、二つの母をもつようになる。甘やかされたともいえるし、栄養がゆきとどいて太るかもしれない。栄養源が二つあること、あるいは二つの舌をもつことから転じて、バイリンガルで教養を身につけた人をさすこともある。ただし、このことわざでは、兄弟親戚の仲が悪いことをたとえているというのだから、二人の母の乳を飲むことによって、本来あるべき親子のきずなや兄弟のきずながくずれてしまっているらしい。

親戚の本性は、ふだんはわからないものであるが、

「あわてふためいて
親戚を知る」

「逆境は友をためす」というように、自分が困ったときにはじめて他人の人柄が知れるものであり、とりわけ親戚についてそのことを明示したことわざである。また、

「ズボンを縫う人がいないのに
遺産を食べる親戚が多い」

といえば、生きているときに世話もしなかったのに、遺産相続に突然やっきになる親戚のすがた

がえがかれている。

遠くにいるためにただ疎遠であるというだけならまだいい。そばにいてもへだたりが生じるかもしれない。近くても遠い仲を、人はウシにたくしてしまう。

「近くでたがいに頭をつく
遠くでたがいにモーモーと鳴く」

ただし、二行めは、遠くにいればまだしも親しく思われるという意味になっている。それならいっそ、いつも遠くにいてたがいに敬意をはらっておくのがいちばん賢いおつきあいというものであろう。